武藏野は落葉の聲に明け暮れぬ雲を帶びた
る日はそらを行く

ゆふまぐれ落葉のなかに見いてつる松かさ
の實を手にのせてみぬ

かすかなる胸さわぎあり燃え燃えぬ黃葉ふ
りしきる冬がれの森

いかにせむ胸に落葉の落ちそめてあるがご
ときをおもひ消しえず

ふりはらひふりはらひつつ行くが見ゆ落葉
がくれをひとりの男

いと靜かにものをぞおもふ山白き十二月こ
そゆかしかりけれ

梢より葉のちるごとくものおもひありとし
もなきにむねのかなしき

うす赤く木枯すさぶ落日の街のほこりのな
かにおもはく

窓あくればおもはぬそらにしらじらと富士
見ゆる家に女すまひき

日向ぼこ側にねむれる犬の背を撫でつつあ
ればさびしうなりぬ

近きわたり寺やたづねてめぐらなむ女を乗
ててややさびしかり

別るる日君もかたらずわれ云はず雪ふる午
後の停車場にあり

別るとて停車場あゆむうつむきのひとの片
手にヴィオロンの見ゆ

別れけり殘るひとりは停車場の群集のなか
に口笛をふく

大鳥の空を行くごとさやりなき戀するひと
も斯くや嘆かむ

男といふ世に大いなるおごそかのほこりに
如かむかなしみありや

ほのかにもおもひは痛しうす青の一月のそ
らに梅つぼみ來ぬ

うきことの限りも知らずふりつもるこのわ
かき日をいざや歌はむ

清(きよ)ければ若くしあればわがこころそらへ去(い)
なむとけふもかなしむ

ゆめのごとくありのすさびの戀(こひ)もしきより
どころなくさびしかりしゆゑ

枯(か)れしのち最(もつと)もあはれ深(ふか)かるは何花(なにばな)ならむ
なつかしきかな

男なれば歳(とし)二十五のわかければあるほどの
うれひみな來(こ)よとおもふ

○獣(けだもの)の病めるがごとくしづやかに運命(うんめい)のあ
とに從ひて行く

○爪(つめ)延びぬ髪も延び來(き)ぬやすみなく人にまち
りてわれも生くなり

、狂ひ鳥日を追へるよりあはれなり行衛も知
らずひとの迷へる

あさましき歌のみおほくなりにけりものの
終りのさびしきなかに

一月より二月にかけ安房の浦に在りき、その頃
の歌六十九首。

ふね待ちつ待合室の雑沓に海をながめて卷
たばこ吹く

おもひ屈し古ぼろ船に魚買の群とまぢりて
房州へ行く

物ありて追はるるごとく一人の男きたりぬ
海のほとりに

病院の玻璃戸に倚れば海こえておぼろ夜伊
豆の山燒くる見ゆ

まつ風の明るき聲のなかにして女をおもひ
青海を見る

なにほどのことにやあらむ夜もいねて海の
ほとりに人の嘆くは

海に來ぬ思ひあぐみてよるべなき身はいづ
くにも捨てどころなく

われひとり多く語りてかへり來ぬ月照る松
のなかの家より

ともすれば喀くに馴れぬる血なればとこと
もなげにも言ひたまふかな

うす青くけふもねがての枕べに這ひまつは
れり海のひびきは

藻草焚く青きけむりを透きて見ゆ裸體の海
女と暮れゆく海と

われよりもいささか高きわか松の木かげに
立ちて君をおもへり

朝起きて煙草しづかにくゆらせるしばしが
ほどはなにも思はず

日は日なりわがさびしさはわがのなり白晝
なぎさの砂山に立つ

ここよりは海も見えざる砂山のかげの日向
にものをおもひぬ

いづかたに行くべきわれはここに在りて
ろ落ち居よわれよ不安よ

風落ちて渚木立に満ちわたる海のひびきの
白昼のかなしみ

ささらぎや海にうかびてけむりふく寂しき
島のうす霞みせり

火の山にのぼるけむりにむかひねてけふも
さびしきひねもすなりき

大島の山のけむりのいつもいつも断えずさ
びしきわがこころかな

晴れわたる大ぞらのもと火の山のけむりは
けふも白白とたつ

夕やみに白帆を下す大船の港入りこそやや
かなしけれ

けふは早や戀のほかなるかなしみに泣くべ
き身ともなりそめしかな

少年のゆめのころもはぬがれたりまこと男
のかなしみに入る

あはれこころ荒みぬればか眼も見えず海を
見れども日を仰げども

人見れば忽ちうすき皮を着るわが性ゆゑの
盡きぬさびしさ

天地に享けしわが性やうやうに露はになり
來海に來ぬれば

つひにわれ藥に飽きぬ酒こひし身も世もあらず飲みて飲み死なむ

やまひには酒こそ一の毒といふその酒ばかり戀しきは無し

あさましく酒をたふべて荒濱に泣き狂へども笑ふ人もなし

愚かなり阿呆鳥の啼くよりもわがかなしみをひとに語るは

あめつちにわが殘し行くあしあとのひとつづつぞと歌を寂びしむ

わがこころ濁りて重きゆふぐれは軒のそとにも行くを好まず

けふもまた變ることなきあら海の渚を同じ
われがあゆめり

安房の國海にうかびて冬知らず紅梅白梅い
まさかりなり

○

けふ見ればひとがするゆゑわれもせしをか
しくもなき戀なりしかな

□

海に行かばなぐさむべしとひた思ひこがれ
し海に來は來つれども

一

耳もなく目なく口なく手足無きあやしきも
のとなりはてにけり

一

眼覺めつるその一瞬にあたらしき寂しきわ
れぞふと見えにける

心より歌ふならねばいたづらに聲のみまよ
ふ宵をかなしむ

○海あをくあまたの山等横伏せりわが泣くと
ころいまだ盡くる無し

○やどかりの殼の如くに生くかぎりわれかな
しみをえは捨てざらむ

なつかしく靜かなるかな海の邊の松かげの
墓にけふも來りぬ

このごろは夜半にぞ月のいづるなりいねが
ての夜もよくつづくかな

いつ知らず生れし風の月の夜の明けがたち
かく吹くあはれなり

牧かげに息をひそめて大風の海に落ちゆく
太陽を見る

蜑が家に旅寢をすれば荒海の落日にむかひ
風呂桶を据ゆ

蜑が家に旅寢かさねてうす赤き榾の火かげ
に何をおもふか

白白とかがやける浪ひかる砂白晝のなぎさ
に卷煙草吸ふ

いたづらにものを思ふとくせづきてけふも
さびしく渚をまよふ

青海の鳥の啼くよりいや清くいやかなしき
はいづれなるらむ

これもまたあざむきならむ「いざ行かむ清き
あなたへ」海のさそへど

砂山の起き臥ししげきあら濱のひろきに出
てて白晝の海聽く

いと清きもののあはれにおもひ入る海のほ
とりの明るき木立

砂山のばらばら松の木のもとに冬の日あび
てものをおもふは

わがほどのちひさきもののかなしみの消え
むともせず天地にあり

好かざりし梅の白きをすきそめぬわが二十
五歳の春のさびしさ

おぼろおぼろ海の風げる日海こえてかなし
きそらに白富士の見ゆ

海のあなたおぼろに富士のかすむ日は胸の
いたみのつのりに増しにき

安房の國の朝のなぎさのさざなみの音のか
なしさや遠き富士見ゆ

うちよせし浪のかたちの砂の上に殘れるあ
とをゆふべさまよふ

思ひ倦めば晝もねむりて夢を見きなつかし
かりき海邊の木立

おぼろ夜や水田のなかの一すぢの道をさわ
めき我等は海へ

おぼろ夜のこれは夢かも渚にはちひさき音の斷えずまろべる

おぼろ夜の多人數なりしそがなかのつかね髪なりしひとを忘れず

日は黄なり灘のうねりの濁れる日敗殘者はまた海に浮く

男なり爲すべきことはなしはてむけふもこの語に生きすがりぬる

鳥が啼く濁れるそらに鳥が啼く別れて船の甲板に在り

わかれ來て船の碇のくさり綱錆びしがうへに腰かけて居り（以上）

このままに無口者となりはてむ云ふべきこ
とはみな腹立たし

おのづからこころはひがみ眼もひがみ暗き
かたのみもとめむとする

角もなく眼なき數十の黑牛にまぢりて行か
ばややなぐさまむ

鉛なすおもきこころにゆふぐれの闇のふる
よりかなしきは無し

ただ一つ黑きむくろぞ眼には見ゆおもひ盡
きては他にものもなし

戀といふうるはしき名にみづからを欺くこ
とにややつかれ來ぬ

いふがごと戀に狂へる身なりしがこころた
えせずさびしかりしは

おほぞらのたそがれのかげにさそはれて
涙あやふくなりそめしかな

◎なにごともこころひとつにおさめおきてひ
そかに泣くに如くことは無し

あはれまたわれうち棄ててわがこころひと
のなさけによりゆかむとす

戀もしき歌もうたひきよるべなきわが生命
をば欺かむとて

かりそめの己がなさけに神かけていのちさ
さぐる見ればあはれなり

つゆほども酔ふこと知らぬうるはしき女を
けふもてあそべども

いかにして斯くは戯ひにし狂ひにし不思議
なりきとさびしく笑ふ

わがいのち安かりしかなひとが泣きひとが
笑ふにうち混りゐて

心いよよ獨りをおもふ身にしみていよいよ
ひとのなさけしげきまま

よるべなき生命生命のさびしさの滿てる世
界にわれも生くなり

うちたえて人の跫音の無かるべき國のあら
じや行きて死なまし

○ 斯くつねに胸のさわがばひろめ屋の太鼓う
ちにもならましものを

行くところとざまかうざま亂れたるわかき
いのちに悔を知らずな

○ 酒飲まば女いだかば足りぬべきそのさびし
さかそのさびしさか

沈丁花みだれて咲ける森にゆきわが戀人は
死になむといふ

大天地みどりさびしくひそまりぬ若き男の
しづかに愁へる

汚れせずわかき男のただひとりこのあめつ
ちをいかに歩まむ

青わだつみ遠くうしほのひびくより深しす
るどし男のうれへる

水いろのうれひに満てる世界なりいまわが
おもひほしいままなる

降ると見えずしづかに青き雨ぞふるかなし
みつかれ男ねむれる

ニコライの大釣鐘の鳴りいてて夕さりくれ
ばつねにたづねき

酒飲まじ煙草吸はじとひとすぢに妻をいだ
きに友のがれたり

消息もたえてひさしき落魄の男をいまだ覚
えたまふや

あらためてまことの戀をとめ行かむ恋しか
たあまりさびしかりしか

戀なりししからざりしか知らねどもうきて
としげきゆめなりしかな

いざ行かむいづれ迷ひは死ぬるまてさめさ
らましをなにかへりみむ

○歸らずばかへらぬままに行かしめよ旅に死
ねよとやりぬこころを

安房の國海のなぎさの松かげに病みたまふ
ぞとけふもおもひぬ

海に沿ふ松の木の間の一すぢのみちを獨り
しけふも歩むか

君が住む海のほとりの松原の松にもたれて
歌うたはまし

山ざくら咲きそめしとや君が病む安房の海
邊の松の木の間に

きはみなき青わだなかにさまよへる海のひ
びきかわれは生くなり

思ひうみ斷えみ斷えずみわがいのち夜半に
ぞ風の流るるを聽く

眞昼日の小野の落葉の木の間ゆきあるかな
きかの春にかなしむ

春は來ぬ落葉のままにしづかなる木立がく
れをそよ風のふく

憫れまれあはれむといふあさましき戀の終
りに近づきしかな

かなしきはつゆ掩ふなくみづからをうちさ
らしつつなほ戀ひわたる

はや夙くもこころ覺めゐし女かとおもひ及
ぶ日死もなぐさまず

女なればあはれなればと甲斐もなくくやし
くもげに許し來つるかな

憫れぞとおもひいたれば何はおき先づたへ
がたく戀しきものを

○逃れゆく女を追へる大たわけわれぞと知り
て眼眩むごとし

斯くてなほ女をかばふ反逆のこころが胸に
ひそむといふは

なにか泣くみづからもわれを欺きし戀なら
ぬかは清く別れよ

唯だ彼女が男のむねのかなしみを解し得て
去るをあはれにおもふ

林なる鳥と鳥とのわかれよりいやはかなく
も無事なりしかな

千度び戀ひ千度びわかれてかの女けだしや
泣きしこと無かるらむ

別れゆきふりもかへらぬそのうしろ見居つ
つ呼ばず泣かずたたずむ

鼻のしたながきをほこる汝とて斯くは清く
も棄てられつるか

別るとて冷えまさりゆく女にはわが泣くつ
らのいかにうつれる

山奥にひとり獣の死ぬるよりさびしからず
や戀の終りは

やみがたき憤りより棄てむとす男のまへに
泣くな甲斐無く

かへりみてしのぶよすがにだもならぬ斯る
別れをいつか思ひし

報いなき戀に甘んじ飽く知らず汝をおもふ
と誰か言はむや

あさましく甲斐なく怨み狂へるは命を蛇に
吸はるるに似る

鳥去りてしろき波寄るゆふぐれの沖のいは
ほか戀にわかれき

海のごとく男ごころ滿たすかなしさを靜か
に見やり歩み去りし子

別れといふそれよりもいや耐へがたしすさ
みし我をいかに救はむ

戀ひに戀ひうつつなかりしそのかみに寧ろ
わかれてあるべかりしを

わがこころ女え知らず彼女が持つあささこ
ころはわれ掬みもせず

再びは見じとさけびしくちびるの乾むとす
る時のさびしさ

柱のみ殘れる寺の壞跡にまよふよりげにけ
ふはさびしき

いつまてを待ちなばありし日のごとく胸に
泣き伏し詫ぶる子を見む

詫びて來よ詫びて來よとぞむなしくも待つ
くるしさに男死ぬべき

別れてののちの互いを思ふこと無かるべき
なり固く誓はむ

ふとしては何も思はずいとあさきかりそめ
ごとに別れむとおもふ

斯くばかりくるしきものをなにゆゑに泣きて詫びしを許さざりけむ

おもひやるわが生のはてのいやはてのゆふべまでをか獨りなるらむ

やうやうにこころもしづみ別れての後のあはれを味はひむとす

灯赤き酒のまどゐもをはりけりさびしき床に寢にかへるべし

冷笑すいのち死ぬべくこちよく涙ながしてわれ冷笑す

死ぬばかりかなしき歌をうたはましよりどころなく身のなりてきぬ

これはこのわが泣けるにはあらざらむあら
めづらしや涙ながるる

とりとめてなにかかなしき知らねどもとす
ればなみだ頬をながるる

わがめぐりいづれさびしくよるべなきわか
きいのちが數さまよへり

さびしきはさびしきかたへさまよへりこの
あはれさの耐へがたきかな

花つみに行くがごとくにいでゆきてやがて
涙にぬれてかへり來ぬ

櫛とればこころいさ、さか晴るるとてさびし
や人のけふも髪をゆふ

富士見えき海のあなたに春の日の安房の渚
にわれら立てりき

おぼろなる春の月の夜落葉のかげのごとく
もわれのあゆめり

まどかけをひきて寢ぬれば春の夜の月はか
なしく窓にさまよふ

首たかくあげては春のそらあふぎかなしげ
に啼く一羽の鵜鳥

街なかの堀の小橋を過ぎむとしふと春の夜
の風に逢ひぬる

春の聲街をながしの三味がゆく二階の窓の
黄なるまどかけ

彼はよく妻ののろけをいふ男まことやすこし眼尻さがりたる

春のそらそれとも見えぬ太陽のかげのほとりのうす雲のむれ

ひややかに梢に咲き満ちしらしらと朝づけるほどの山ざくら花

咲き満てる櫻のなかのひとひらの花の落つるをしみじみと見る

かなしめる櫻の聲のきこゆなり咲き満てる大樹白昼風もなし

寢ざめぬて夜半に櫻の散るをきく枕のうへのさびしきいのち

海なかにうごける青の一點を眼にとこしへ
に死せしむるなかれ

よるべなみまた戀りずまに萠えそめぬあは
れやさびしこのこひごころ

よるべなき生命生命が對ひ居のあはれよる
べなき戀に落ちむとす

はかなかりし戀のうちなるおもひてのすく
なき數を飽かずかぞふる

かへるべき時し來ぬるかうらやすしなつか
しき地へいざかへらなむ

知らざりきわが眼のまへに死といふなつか
しき母のとく待てりしを

○をさな子のごとくひたすら流涕すふと死に
なむと思ひいたりて

海の邊に行きて立てどもなぐさまず死をお
もへどもなほなぐさまず

○まことなり忘れねたりきいざゆかむ思ふこ
となしに天のあなたへ

○根の知れぬかなしさありてなつかしくてこ
ろをひくに死にもかねたる

○死をおもへば梢はなれし落葉の地にゆくよ
りなつかしきかな

ゆふ海の帆の上に消えしそよ風のごとくに
この世去なとむぞおもふ

追はるるごと驚くひまもあらなくに別れき
つひに見ざるふたりは

若うして傷のみしげきいのちなり蹌踉とし
てけふもあゆめる

然れども時を經ゆかばいつ知らずこのかな
しさをまた忘るべし

ふたたびはかへり來ることあらざらむさな
りいかてかまたかへり來む

ほのかなるさびしさありて身をめぐるかな
しみのはてにいまか來にけむ

思ふまま涙ながせしゆふぐれの室のひとり
は石にかも似む

死に隣る戀のきはみのかなしみの一すぢみ
ちを歩み來しかな

故わかずわれら別れてむきむきにさびしき
かたにまよひ入りぬる

見るかぎり友の顏みな死にはてしさびしき
なかに獨りものをおもふ

おぼろ夜の停車場内の雜沓に一すぢまぢる
少女の香あり

疲れはてて窓をひらけばおぼろ夜の嵐のな
かになく蛙あり

ゆく春の軒端に見ゆるゆふぞらの青のにご
りに風のうごけり

ちやるめらの遠音や室にちらばれる密柑の
皮の香を吐くゆふべ

「うしなひし夢をさがしにかへりゆく若きい
のちのそのうしろかげ

「わが生命よみがへり來ぬさびしさにわかく
さのごとくうちふるへつつ

わが行くは海のなぎさの一すぢの白きみち
なり盡くるを知らず

玻璃戸濡り暮春の月の黄に匂ふ室に疲れて
かへり來しかな

ガラス戸にゆく春の風をききながら獨り床
敷きともしびを消す

四月すゑ風みだれ吹くてよひなりみだれて
ひとのこひしき夜なり

○あめつちのみどり濃き日となりぬ我等きそ
うてかなしみにゆく

また見じと思ひさだめつさりげなく靜かに
ひとを見て別れ來ぬ

眞晝の日そらに白みぬ春暮れて夏たちそむ
る嵐のなかに

たた一歩踏みもたがへて西ひがしわが生の
かぎりとほく別れぬ

うす濁る地平のはての青に見ゆかすかに夏
のとどろける雲

めぐりあひやがてただちに別れけり雨ふる
四月すゑの九日

ゆく春の嵐のみだれ雨のみだれしづかにひ
とと別るる日なり

かなしみの歩みゆく音のかすかなり疲れし
胸をとほくめぐりて

しめやかに嵐みだるるはつ夏の夜のあはれ
を寝ざめながむる

夏を迎ふおもひみだれてかき濁りつかれし
むねは歌もうたはず

旅人あり街の辻なる繰瓦屋の根に行き倒れ
死にはてにける

いつしかに春は暮れけりてころまたさびし
きままにはつ夏に入る

空のあなた深きみどりのそこひよりさびし
き時にかよふひびきあり

あをあをと若葉萠えいづる森なかに一もと
松の花咲きにけり

そこ知らず思ひ沈みて眞晝時一樹の青のた
かきにむかふ

大木の幹の片へのましろきにこぼれぬる日
の夏のかなしみ

窓ちかき水田のなかの榛の木の日にげに青
み嵐するなり

大木の青葉のなかに小鳥啼く細かに晝の日
をみだしつつ

とりみだし哀しみさけび讃嘆すああ天地に
夏の來れる

生くといふ否むべからぬちからより逃れて
戀にすがらむとしき

ひややかにことは終りき別れてき斯くある
われをつくづくと見る

思ひいでてなみだはじめて頰をつたふ極り
知らぬわかれなりしかな

女ひとり棄てしばかりの驚きに眼覺めてわ
れのさびしさを知る

甲斐もなくしのびしのびにいや深にひとに
戀ひつつ衰へにけり

忽然と息斷えしごとく夜ふかく寢ざめてひ
とをおもひいでしかな

怨むまじやなにかうらみむ胸のうちのかな
しきこころ斯くちかひける

ありし夜のひとの枕に敷きたりしこのかひ
なかも斯く痩せにける

わが戀の終りゆくころとりどりに初なつの
花の咲きいでにけり

音もなく人等死にゆく音もなく大あめつち
に夏は來にけり

海山のよこたはるごとくおごそかにわが生
くとぶを信ぜしめたまへ

きはみなき生命のなかのしばらくのこのさ
びしさを感謝しまつる

あなさびし白晝を酒に酔ひ痴れて皐月大野
の麥畑をゆく

青草によこたはりねてあめつちにひとりな
るものの自由をおもふ

畑なかにふと見いでつる痩馬の草食みゐた
り水無月眞晝

ひややかにつひに眞白き夏花のわれ等がな
かにあり終りけり

棕櫚の樹の黄色の花のかげに立ち初夏の野
をとほくながむる

初夏の野ずゑの川の濁れるにものの屍の浮
きしづみ行く

けだものはその死處とこしへにひとに見せ
ずと聞きつたへけり

水無月の洪水なせる日光のなかにうたへり
麥刈少女

遠くゆきまたかへりきて初夏の樹にきこゆ
なり眞晝日の風

木蔭よりなぎさに出てぬ渚より木かげに入
りぬ海鳴るゆふべ

松咲きぬ楓もさきぬはつ夏のさびしきはな
の咲きそめにけり

郊外に友のめうとのかくれ住む家をさがし
て麥畑をゆく

夜のほどに凋みはてぬる夏草の花あり朝の
瓶の白さよ

少女子の夏のころもの襞にゐて風わたるご
とにうごくかなしみ

母となりてやがてつとめの終りたるをみな
の顏に眼をとめて見る

夏深しかの山林のけだものごとく生きむ
と雲を見ておもふ

麥の穂の赤らむころとなりにけりひと棄て
しのちのはつ夏に入る

いつ知らず夏も寂しう更けそめぬほのかに
合歡の花咲きにけり

わがこころ動くともなく青草に寝居つつ空
の風にしたがふ

夏草の延び青みゆく大地を静かに踏みて我
等あゆめり

深草の青きがなかに立つ馬の肥えたる脚に
汗の湧く見ゆ

夏白晝うすくれなゐの薔薇よりかすかに蜂
の羽音きこゆる

わが友の妻とならびて椽に立ち眞晝かへて
の花をながむる

麥畑の夏の白晝のさびしさや讃美歌低くく
ちびるに出づ

黄なる麥一穂ぬきとり手にもちて雲なきも
との高原をゆく

高原や青の一樹とはてしなき眞白き道とわ
がまへに見ゆ

麥畑のなかにうごける農人を見ゐつつなみ
だしづかにくだる

わが顔もあかがねいろに色づきぬ高原の麥
は垂穂しにけり

ひややかに涙はひとりながれたりこころ
れしく死なむとおもふに

われみづから死をしたしくおもふころ誰彼
ひとのよく死ぬるかな

火の山にけむりは斷えて雪つみぬしづかに
われのいつか死ぬらむ

渚より海見るごとく汪洋とながるる死のま
へにたたずむ

夏白晝あるかなきかのさびしさのこころの
うへに消えがてにする

松葉散る皐月の暮の或るゆふべをんな棄て
むと思ひたちにき

影のごとくこよひも家を出てにけり戸山が
原の夕雲を見に

皐月ゆふべ梢はなれし木の花の地に落つる
間のあまきかなしみ

ひとつひとつ足の歩みの重き日の皐月の原
に頬白鳥の啼く

日かげ滿てる木の間に青き草をしき梢をわ
たる晝の風見る

見てあればかすかに雲のうごくなり青草の
なかにわれよこたはる

わがいのち空に滿ちゆき傾きぬあなはるか
なりほととぎす啼く

たそがれの沼尻の水に雲うつる麥刈る鎌の音もきこえ來る

なつかしさ皐月の岡のゆふぐれの青の大樹の蔭に如かめや

落日のひかり梢を去りにけり野ずゑをとほく雲のあゆめる

けむりありほのかに白し水無月のゆふべう らがなし野羊の鳴くあり

わが行けばわがさびしさを吸ふに似る夏のゆふべの地のなつかし

麥すでに刈られしあとの畑なかの徑を行きぬ水無月ゆふべ

椅子に耐へず室をさまよひ家をいで野に行
きまたも椅子にかへりぬ

野を行けば麥は黄ばみぬ街ゆけばうすき衣
ををんな着にけり

やうやうに戀ひうみそめしそのころにとり
わけ接吻をよくかはしける

強いられて接吻するときよ戸の面には夏の
白日を一樹そよがず

いちいちに女の顔の異るを先づ第一の不思
議とぞおもふ

六月の濁れる海をふとおもひ午後あわただ
し品川へ行く

とかくして動きいでたる船蟲の背になまぐ
さき六月の日よ

月いまだひかりを知らず水無月のゆふべは
ながし汐の満ち來る

海のうへの月のほとりのうす雲にほのかに
見ゆる夏のあはれさ

少女等のかろき身ぶりを見てあればものぞ
かなしき夏のゆふべは

いささかを雨に濡れたる公園の夏の大路を
赤き傘ゆく

いたづらに麥は黄ばみぬ水無月のわがさび
しさにつゆあづからず

八月の街を行き交ふ群集の默せる顏のなつかしきかな

とこしへに逢ふこと知らぬむきむきのこころこころの寂しき歩み

あめつちに獨り生きたりあめつちに斷えみたえずみひとり歌へり

六七月の頃を武藏國多摩川の畔なる百草山に送りぬ、歌四十六首。

涙ぐみみやこはづれの停車場の汽車の一室にわれ入りにけり

○ともすればわが蒼ざめし顏のかげ汽車のガラスの戸にうつるあり

雨白く木の間にけぶる高原を走れる汽車の
窓によりそふ

水無月の山越え來ればをちこちの木の間に
白く栗の咲く見ゆ

とびとびに落葉せしごとわが胸にさびしさ
散りぬ頬白鳥の啼く

啼きそめしひとつにつれてをちこちの山の
月夜に梟の啼く

たそがれのわが眼のまへになつかしく木の
葉そよげり梟の啼く

夕山の木の間にいつか入りも來ぬさだかに
物をおもふとなしに

あをばといふ山の鳥啼くはじめ無く終りを
知らぬさびしき音なり

わがこころ沈み來ぬれば火の山のけむりの
影をつねにやどしぬ

檜の林松のはやしの奥ふかくちひさき路に
したがひて行く

青海のうねりのごとく起き伏せる岡の國あ
りほととぎす行く

わが死にしのちの靜けき斯る日にかく頬白
鳥の啼きつづくらむ

紫陽花のその水いろのかなしみの滴るゆふ
べ蜩のなく

煙青きたばこを持ちて家を出で林に入りぬ
雨後の雫す

拾ひつるうす赤らみし梅の實に木の間ゆき
つつ齒をあてにけり

かたはらの木に頬白鳥の啼けるありてころ
恍たり眞晝野を見る

日を浴びて野ずゑにとほく低く見ゆ涙をさ
そふ水無月の山

松林山をうづめて靜まりぬとほくも風の消
えゆけるとき

眞晝野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵑
の聲きこえ來る

梅雨晴の午後のくもりの天地のつかれしな
かにほととぎす啼く

山に來てほのかにおもふたそがれの街にの
こせしわが靴の音

或るゆふべ思ひがけなくたづね來しさびし
き友をつくづくと見る

幹白く木の葉青かる林間の明るきなかに歩
み入りにき

わが行けば木木の動くがごとく見ゆしづか
なる日の青き林よ

かなしめる獣のごとくさまよひぬ林は深し
日は狹青なり

はてしなくあまたの岡の起き伏せり眼に日
光の白く滿つかな

別るべくなりてわかれし後の日のこのさび
しさをいかに追ふべき

棄て去りしのちのたよりをさまざまに思ひ
つくりて夜夜をなぐさむ

ゆめみしはいづれも知らぬ人なりき寢ざめ
さびしく君に涙す

遠くよりさやさや雨のあゆみ來て過ぎゆく
夜半を寢ざめてありけり

ゆくりなくとあるゆふべに見いてけり合歡
のこずゑの一ふさの花

きはみなき旅の途なるひとりぞとふとなつ
かしく思ひいたりぬ

六月の山のゆふべに雨晴れぬ木の間にかな
し日のながれたる

ゆふぐれの風ながれたる木の間ゆきさやか
にものを思ひいてしかな

ゆふ雨のなかにほのかに風の見ゆ白夏花の
そぼ濡れて咲く

放たれし悲哀のごとく野に走り林にはしる
七月のかぜ

松林風の断ゆればわがこころふるへておも
ふ黒髪の香を

かなしきは夜のころもに更ふる時おもひ
づるがつねとなりぬる

鋭くもわかき女を責めたりきかなしかりに
しわがいのちかな

七月の山の間に日光は青うよどめり飛ぶつ
ばめあり

午後晴れぬ煙草のあまさしとしとに胸に浸
む日ほととぎす啼く

暈帶びて日は空にあり山山に風青暗しほと
とぎす啼く

生くことのものうくなりしみなもとに時に
おもひのたどりゆくあり

うち断えて杜鵑を聞かずうす青く松の梢に
實の満ちにけり

わがこころ静かなる時つねに見ゆ死といふ
もののなつかしきかな　（以上）

秋風吹くつかれて獨りたそがれの露臺にの
ぼり空見てあれば

いつ知らず重ねて胸に置きたりし双のわが
手を見れば涙落つ

このごろの迷ひ亂れにありわびて寂びしや
われに歸らむとする

しづやかに大天地に傾きて命かなしき秋は
來にけり

まれまれに云ひし怨言のはしばしのあはれ
なりしを思ひ出づる日

物をおもふ電車待つとて十月の街の柳のか
げに立ちつつ

公園の木草かすかに黄に染みぬ馴れしベン
チに今日もいこへる

松蟲鳴きそよ風わたるたそがれの小野の木
の間を過ぎなやむかな

日は黄なり斑斑として十月の風みだれたる
木の間に人に

栗の樹のこずゑに栗のなるごとき寂しき戀
を我等遂げぬる

たはむれのやうに握りし友の手の離しがた
かり友の眼を見る

髪ながく垂れて額の蒼を掩ふ無言よ君にく
ちづけてゐむ

野には來ぬこころすこしもなぐさまず木の
間を行きつ草に座りつ

ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかへ
る彼の岡の上に

波白く斷えず起れる新秋のとほき渚に行か
むとぞおもふ

けふ別れまた逢ふこともあるまじきをんな
の髪をしみじみと見る

こころ永く待つといふなりこころ永く待つ
といふなりかなしき女
冷やかに部屋にながるる秋の夜の風のなか
なり我等は默す

こころ斯く荒みはてぬるわが顏のその唇を
ちもふに耐へず

秋の白晝風呂にひたりて疲れたる身はおも
ふなり女のことを

破れたるたたみのうへに一脚の寢椅子を置
きつ秋の夜を寢る

うまき肉たふべて腹の滿ちぬれば壁にもた
れてゐねぶりをする

酔ふもまたなにかはせむすべからく酒を
乗てむとおもひ立ちにき

二階より更けて階子をくだる時深くも秋の
夜を感じぬる

おもはるるなさけに馴れて驕りたるひとの
こころを遠くながむる

手をとりて心いささかしづまりぬもの言へ
ば彌寂しさの増す

9

秋のあさうなじに薄く白粉の殘れるを見つ
つ別れかへりぬ

わがちさき帽のうへより溢れ來る秋のひか
りに血は安からず

健やかに身はこころよく饑ゑてあり野菊の
なかに日を浴びて臥す

四階よりのぞめば街の古濠にゆふべ濁りて
潮のさし來る

靴屋あり靴をつくろふ鍛治屋ありくろがね
を打つ秋の日の街

くちもとのいふやうもなく愛らしきこの少
年にくちづけをする

わかくさの山の麓は落葉せむいまか靜かに
鹿の歩まむ

秋風吹き日かげさやかに流れたる窓にふた
りは旅をおもへり

或時はなみだぐみつつありし日の寂しさ戀
にかへらむとする

はてしなくひろき林に行かしめよしばし落
葉の音を斷たしめよ

彼のとほき林に棲める獣はかなしめる日の
無きかあらじか

われ死なば林の地を堀りかへしひとに知ら
ゆな其處に埋めよ

、林には一鳥啼かず木のかげにたふれて秋に
身を浸し居り

、涙落つまぬかれがたき運命のもとにしづか
に眼を瞑ぢむとし

9

棄て去りしわが女をばさまざまに人等啄む
さまの眼に見ゆ

かへり來よ櫻の紅葉散るころぞわがたましひよ夙く歸り來よ

しかれども一度び戀に沈み來しこのかなしさをいかに葬らむ

さまざまの女の群に入りそめぬ戀に追はれし漂泊人は

ことごとく落葉しはてし大木にこよひ初めて風のきこゆる

晴れわたる空より樹より散りきたるああ落葉のさまのたのしさ

かきいだけば胸に沈みてよよと泣くそのかみの日の少女のごとく

妻つれてうまれし國の上野に友はかへりぬ秋風吹く日

木木のかげまだらに落ちてわが肩に秋の日重し林に死なむ

彼の國の清教徒よりなほきよく林に入りて棲まむともおもふ

ありつる日死をおもふことしげかりし身は茫然と落葉を見る

山蔭に吸はれしごとく四五の村巣くへる秋の國に來にけり　（以下伴二と旅に出てて）

名も知らぬ河のほとりにめぐり來ぬけむり
流るる秋の夕に

白白とゆふべの河の光るありたひらの國の
秋の木の間に

雲うすく空に流れて凪ぎたる日林の奥に落
葉斷えせず

落葉樹まばらに立てる林間の地平にひくし
遠山の見ゆ

身を起しまた忍びかに歩をやりぬ落葉ばや
しの奥の木の間を

手ふるればはらはらと落葉す林のおく
の黄なる一もと

林間の落葉を踏みつ樹に倚りつ涙かきたれ
なにを歌ふぞ

ながながと地上に身をば横へぬ夕陽の前の
落葉林に

かきあつめ白晝落葉に火をやりぬ林の奥へ
白き烟す

ひややかに落葉林をつらぬきて鐵路走れり
限りを知らず

うす甘き煙草の毒に醉ひはてぬ黄なる林の
奥の一人は　（以上）

軒下の簾のひびきと硝子戸のゆふ風の音と
椅子に痛める

夕暮のそよ風のなかにいたみ出づ倦みし額
に浮ける蒼さは

新しき驚ペンに代へしゆふぐれの机のうへ
に滿てるかなしみ

ゆふぐれは蒼みて來りまた去りぬ窓邊の椅
子にわれの埋るる

ゆふ日さし窓のガラスは赤赤と風に鳴るな
り長椅子に寢る

數知れぬ女の肌に溺れたるこのわかき友は
酒を好まず

打ち連れて活動寫眞觀に行きし女のあとに
灯をともすなり

果實をあまたたふべし夕まぐれ飯の白きを
見るは眼痛し

家家にかこまれはてしわが部屋の暗きにこ
もりストーヴを焚く

悲しげに赤き火を見せゆふ闇の椅子に人あ
り煙草は匂ふ

黒髪の匂ふより哀しつかれたる身にゆふぐ
れのいどみ寄るさま

海に沿ひ山のかげなるみだらなる溫泉町に
冬は來りぬ

涙たたえ若かる友はかなしみぬ見よわが戀
は斯くもまつたし

容れがたし一度びわれを離れたる汝かこ
ろはまた容れがたし

白白と鷗まひ出づる山かげの冷き海をおも
ひ出でけり

離れたる愛のかへるを待つごときこの寂し
さの咒ふべきかな

この河の流れて海に入らむさま蘆の間にお
もひ悲しむ

灯をともさむとする横顔の友の疲れは闇に
浮き出づ

命なりそのくちびるを愛せよと消息に書き
涙落しぬ

○衰へしひとの額をかきいだき接吻せむとすれば あはれ眼を瞑づ

半島の國の端なる山かげのちさき港に帆を下しけり　（以下旅に出てて）

枝垂れ咲けり暗綠色の浪まろぶ海の岸なる老樹の椿

青き白き濤のみだれにうちまぢり磯に一羽の小鳥啼くあり

ひろびろと光れる磯に獨りゐて貝ひろふ手に眺め入りぬる

越え歩りく海にうかべる半島の冬のうす黄の岡より岡へ

旅人は海の岸なる山かげのちひさき町をい
ま過ぎるなり

海岸のちひさき町の生活の旅人の眼にうつ
るかなしさ

男あり渚に船をつくろへり背にせまりて海
のかがやく

ゆふ日赤き漁師町行きみだれたる言葉のな
かに入るをよろこぶ

風凪ぎぬ夕陽赤き灣内の片すみにゐて帆を
おろす船

わが船は岬に沿へり海青しこの伊豆の國に
雪のつもれる

夕陽の赤くしたたる光線にうかび出てたり
岬の街は

○春白晝ここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり（以上）

――（完）――

明治四十三年四月五日印刷
明治四十三年四月廿三日發行

正價金七拾五錢

著作者　若山繁
發行者　京橋區南傳馬町三丁目十番地　西村寅次郎
印刷者　神田區松下町七、八番地　横田五十吉

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地　東雲堂書店
電話本局一六三九、振替貯金五六一四

不許複製

横田活版所印刷

東雲堂書店發行書

中村星湖氏著　高村光太郎氏裝幀

新刊

小說　星湖集

四六判三百六十頁
瀟洒裝幀
定價六拾錢
送費八錢

著者は青年作家中その異色ある作風と、摯實なる態度とを以て夙に令名を馳せ又最も未來ありと囑せらるゝ作家也。今茲にその近業十四篇を集めて更に世に諮ふ。

內容

一切の事　白雖
朝鮮へ朝鮮から　つゝ音
石を持つた女　村の「西郷」
木像の批評　行路病者
つなぎ糸　嬌笑
敵　ころ
畑　犬　地
頁　ひ　粉

東雲堂書店發行書

田山花袋先生選　木下茂　山田實畫

再版

小說　二十一篇

四六判三百頁
洋裝美本
定價五十五錢
送費六錢

本書は過去四年間に文壇世界誌上に現はれたる青年の作より、田山先生頁に撰拔して作者十三人、作品二十二篇を出したるもの。青年の群の眼に映じたる人生と新らしき時代とは如何なる姿を以て描き出されたりや、文藝を談ぜんとする青年諸君及び短篇小說を描かんとする諸君子の一讀を望む。

東雲堂書店發行書

岩野泡鳴氏新作

近刊

長編小說

放浪

定價　郵稅　未定

「神秘的牛獸主義」「新自然主義」の著者たる氏の一行一動は現日本文壇をして、はた世の人々をして、常に眼を欲だゝしむるものありき。昨冬著者北海樺太の天地を放浪するや、その耳目に觸れし雄大にして陰慘なる自然と複雜したる人生とは著者の强烈なる匂ひを交へて歸來筆をとりしその新作長編小說『放浪』に最も濃厚なる色を以て描き出されたり。本書の出版は以て寥々たる戊戌文壇を强駭せしむるものあるべし。

東雲堂書店發行書

□ 河井酔茗著 □

長原止水裝幀
岡田三郎助書

散文詩集

霧

四六判無比美本

定價金五十五錢

「散文詩」は近代藝術の一新體なり、最も自由なる思想發表の樣式なり。日本の文壇遂に散文詩の天地來るべし。著者は夙くその公にしつゝありし散文詩の作百篇を集めて世に出す。新らしく香はしき藝術の香に浴せんとするものは本書を繙くべし。

送料金六錢

東雲堂書店發行書

近刊

ツルゲネフ散文詩

四六判二百頁
定價三十五錢
送料四錢

島村抱月氏序
馬場孤蝶氏序

仲田勝之助譯

本書はツルゲネフが思想の精華にして、彼が心的縮圖也。その文體の精練、觀察の深奥鋭利なる他にその比を見ず。今五十篇全部を譯し更に彼が長逝數ケ月前に書ける有名なる「門口」一篇を加ふ。また小引として譯者の解說を附し、以て彼が思想と探れ。文體を學ばんとするもの、便に供す。譯は忠實精緻、坊間に行はる、粗笨なるものとは少しく撰を異にせり。

東雲堂書店發行書

十月會歌集

黎明

（製本既成發賣）

歌數五百首
定價四十錢
送費四錢

本書は下記十月會諸氏の最も得意なる歌各數十首を收めたり。

水野葉舟　牛口瓦平
高瀬俊郎　田中完治
植松壽樹　岡田道一
綱野新二郎　石井貞子
川崎左右　山下要
加藤豐　宗耕一
松村英一　窪田空穂

38

086534−000−4

29−325

另り離雁 上巻

若山　牧水／著

M43

DBD−1400